

称号及び氏名 博士(看護学) 三吉 友美子

学位授与の日付 平成24年3月31日

論文名 看護技術の学習方略に関する研究
— 尺度開発と関連要因の検討 —

論文審査委員 主査 星 和美
副査 杉本 吉恵
副査 高見沢 恵美子

論文内容の要旨

【研究目的】

看護職にとって必要となる生涯学習や、看護基礎教育における看護実践能力および学習能力の育成の必要性から考えて、看護学生が看護技術を学ぶ初期段階から有効な学習方略が身につくような教育的関わりが重要とされる。しかし、看護技術の学習方略の実態は明らかにされておらず、それを診断するための尺度は存在していない。看護技術学習方略尺度を開発し学習方略の使用状況の測定が可能になれば、看護技術教育の成果を学生が行う学習の側面から評価することが可能になる。そして、看護技術学習方略と関連する要因を明らかにすることができれば、有効な学習方略の活用を促進するための教育プログラムの開発へと研究をすすめることができる。そのことは、看護基礎教育における看護実践能力と学習能力の育成のための一つの方策を提示することになる。そこで研究の目的は、日本全国で使用できる看護学生の「看護技術学習方略尺度」を開発することと、看護技術の学習方略に影響を与える要因を明らかにすることである。

【研究方法】

研究は予備研究および本研究で行った5つの調査から構成される。

調査1：グループインタビューを用いた看護技術学習方略の質的検討

A 県内の三年課程の看護師学校養成所（以降は学校養成所と記す）4 校に在籍する看護学生 25 名を対象にグループインタビューを実施（調査期間：2008 年 2 月～4 月）し、看護学生が看護技術の修得過程で用いる学習方略を抽出した。

調査 2：看護技術学習方略項目に対する内容妥当性の検討

看護基礎教育において看護技術教育に携わった経験者 10 名を対象に郵送調査を行った（調査期間：2009 年 7 月～8 月）。調査 1 の結果と先行文献から作成した看護技術学習方略 89 項目に対して、概念との関連を content validity index at the item level（以降は I-CVI と記す）を用いて数量的に検討した。

調査 3：看護技術学習方略尺度案の作成

中部・近畿地方の学校養成所 11 校に在籍する看護学生 769 名を対象に看護技術学習方略項目を用いて留め置き調査を行った（調査期間：2009 年 7 月～9 月）。調査 2 の結果を考慮した項目分析および探索的因子分析、Cronbach の α 係数（以降は α 係数と記す）により看護技術学習方略尺度案を作成した。

調査 4：全国調査による尺度の確定と看護技術の学習方略と要因との関連

日本全国の学校養成所に在籍する 3 年次の看護学生 682 名を対象に、調査 3 で作成した看護技術学習方略尺度案を用いて郵送調査を行った（調査期間：2010 年 4 月～5 月）。調査内容は、看護技術の修得過程で用いる学習方略と、その関連要因である看護技術の学習観と学習動機であった。その他に性別と学校養成所の種類や入学前の教育経験、受講した看護技術の授業方法などの背景を調査した。探索的因子分析と α 係数により「看護技術学習方略尺度」を確定した後に、共分散構造分析により要因との関係性を検討した。

調査 5：「看護技術学習方略尺度」の安定性と基準関連妥当性の検討

A 県内の学校養成所 2 校に在籍する看護学生 213 名を対象に、留め置き調査を行った（調査期間：2010 年 9 月～11 月）。テスト・再テスト法により尺度の信頼性を、既存尺度との相関係数から基準関連妥当性を検討した。

いずれの調査も大阪府立大学看護学部研究倫理委員会の承諾を得て実施した。

【結果】

調査 1 のグループインタビューにより看護技術の修得過程で用いる学習方略を抽出した。調査 2 ではそれらを基に作成した看護技術学習方略 89 項目の内、84 項目の内容妥当性を確認し

た。続く調査3では、84項目の項目分析を行った後、因子分析を行った結果、5下位尺度で構成される25項目からなる看護技術学習方略尺度案を作成した。 α 係数は0.90であった。

調査4では、探索的因子分析の結果、[計画・調整]、[ピア学習]、[認知的志向]、[情動調整]の4下位尺度で構成される17項目からなる「看護技術学習方略尺度」を確定した。 α 係数は0.82であった。共分散構造分析の結果、[充実志向]学習動機は学習方略全般を増加させるのに対して、[訓練志向]学習動機は[計画・調整]方略に、[学習量志向]学習観は[情動調整]方略に特異的に作用することが明らかになった。「看護技術学習方略尺度」の得点からは、尺度得点が高くて全体的学習方略を多く使用しているとは限らないことが示唆された。また、大学生よりも専門学校等の養成所の学生の方が[認知的志向]方略の使用が多かったが、その他の方略では性別や学校養成所の種類、授業方法などの教育背景による違いはなかった。

調査5のテスト・再テスト法による信頼性係数は0.69 ($p < 0.01$)であったことから、「看護技術学習方略尺度」が一定の安定性を保持していることを確認できた。また、既存尺度である「メタ認知的方略」とのPearsonの相関係数は0.55 ($p < 0.01$)であった。

【考察】

開発した4下位尺度17項目からなる「看護技術学習方略尺度」は、 α 係数とテスト・再テスト法の結果から一定の信頼性を保持していることが確認できた。さらに、尺度を構成する項目がグループインタビューにより抽出された内容と矛盾しないこと、I-CVIの基準値を満たす項目を尺度項目として採用したこと、因子分析の結果から、尺度の妥当性を確認できたこと等から日本全国の看護学生の看護技術学習方略を測定する尺度として使用できるものであると考える。特に[ピア学習]学習方略は他の対象者では抽出されていない看護学生独自の内容であるといえる。また、看護技術の学習方略に影響を与える要因の検討では、学習自体を楽しむという[充実志向]学習動機がすべての学習方略に影響することが認められたことから、[充実志向]学習動機を高めるかかわりが効果的であると考えられる。他の要因との関連を検討することが今後の課題になる。

学位論文審査結果の要旨

看護職にとって必要となる生涯学習や看護基礎教育における看護実践能力および学習能力の育成の必要性から、看護学生が看護技術を学ぶ初期段階から有効な学習方略が身につくような教育的関わりが重要とされる。本研究は看護技術教育の成果を、学生が行う学習の側面から評価することを目指して、日本全国の看護学生を対象に使用できる「看護技術学習方略尺度」を開発すること、そして看護技術の学習方略に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした独創的な研究である。

研究は5つの調査から構成され、その概要は①グループインタビューを用いた看護技術学習方略の質的検討、②看護技術学習方略項目に対する内容妥当性の検討、③看護技術学習方略尺度案の作成、④全国調査による尺度の確定と看護技術の学習方略と要因との関連の検討、⑤「看護技術学習方略尺度」についてテスト・再テスト法による信頼性と基準関連妥当性の検討であり、研究方法は計画的かつ段階的である。

調査④では日本全国の調査に承諾が得られた学校養成所の3年次看護学生682名を対象に、調査③で作成した尺度案を用いて郵送調査を行い389名から回答を得、探索的因子分析の結果、[計画・調整]・[ピア学習]・[認知的志向]・[情動調整]の4下位尺度・17項目で構成される「看護技術学習方略尺度」を確定した。特に[ピア学習]は他の対象者では抽出されていない看護学生独自の内容であった。また共分散構造分析の結果、学習方略に影響を与える要因として、[充実志向]学習動機は学習方略全般を増加させること、[訓練志向]学習動機は[計画・調整]方略に、また[学習量志向]学習観は[情動調整]方略に特異的に作用することを明らかにした。

本研究は、日本全国で使用できる看護学生の「看護技術学習方略尺度」を開発した上で、学習方略に影響を与える関連要因を明らかにしたことにより、看護基礎教育における看護実践能力と学習能力の育成のための一つの方策を提示した意義ある優れた研究であるといえる。

これらの研究を段階的にまとめた本論文は、看護学研究の発展に寄与する学術的価値を有しており、博士(看護学)論文として価値あるものとして、審査員全員一致で認めるものである。